第３分科会

道徳教育

押谷　由夫　先生

<略歴>

◎　武庫川女子大学大学院教授（平成29年４月より）

・1952年、滋賀県生まれ

・広島大学大学院修了　博士（教育学）

・高知女子大学助教授等を経て、昭和63年より文部省・文部科学省教科調査官、平成13年10月より昭和女子大学大学院教授

・日本道徳教育学会名誉会長

・心を育てる教育研究会主宰

・（公）「小さな親切」運動本部顧問

・（公）日本弘道館理事

・文部科学省各種会議委員を歴任　等

<著書・編著>

「総合単元的道徳学習論の提唱」1995 文溪堂

「新しい道徳教育の理念と方法」1999 東洋館出版

「『道徳の時間』成立過程に関する研究」2001 東洋館出版

「さわやかマナー」（全３巻）編著 2002 玉川大学出版部

「世界の道徳教育」編訳 2002 玉川大学出版 等

「豊かな自分づくりを支える道徳の授業」（全６巻）編著 2003 教育出版

「保育と道徳」編著 2006 保育出版社

「CD-ROM版　小学校道徳教育資料・実践事例集」編著 2006 ニチブン

「各教科で行う道徳指導」編著 2009 教育開発研究所

「道徳で学校・学級を変える」編著 2010 日本文教出版

「道徳性形成・徳育論」編著 2011 NHK出版 等

「道徳の時代がきた」編著 2013 教育出版

「道徳の時代をつくる」編著 2014 教育出版

「新教科道徳はこうしたらおもしろい」編著 2015 図書文化

「自ら学ぶ道徳教育」（第２版）編著 2016 保育出版社

「道徳教育の理念と方法」編著 2016 NHK出版

「アクティブ・ラーニングを位置づけた小学校特別の教科道徳の授業プラン」 編著 2017 明治図書

「平成29年度改訂 中学校教育課程実践講座 特別の教科 道徳」編著 2018 ぎょうせい

「平成29年度改訂 小学校教育課程実践講座 特別の教科 道徳」編著 2018 ぎょうせい

「生きるための『正義』を考える本」編著 2019 学研プラス

「新道徳教育全集　第１巻　道徳教育の変遷・展開・展望」編著 2021 学文社

令和5年8月5日

第40回 教育研究全国大会(宮崎大会)

第3分科会（道徳教育）　助言者ゼミナール

変動社会を心豊かに生き抜く子どもたちを育てる道徳教育を

ー日本型学校教育の根幹に着目してー

武庫川女子大学　　押谷由夫

話の大筋

特に次の３点に絞ってお話しします

1．これから進められる学校改革の動向

2．学校改革をリードする道徳教育

3．これからの道徳教育、「特別の教科　道徳」の課題と対応

1　これから進められる学校改革の概要

1－1　改訂学習指導要領が特に求めていること

※　改訂に込められた思い（文科省　ホームページより）

学校で学んだことが，子供たちの「生きる力」となって，**明日に，そしてその先の人生につながってほしい。**これからの社会が，どんなに変化して予測困難な時代になっても，**自ら課題を見付け，自ら学び，自ら考え，判断して行動し，それぞれに思い描く幸せを実現してほしい。**そして，**明るい未来を，共に創っていきたい。**「学習指導要領」には、そうした願いが込められています。

- ○　何ができるようになるの？（資質・能力の三つの柱）
- ○　どのように学ぶの?（主体的・対話的で深い学び）
- ○　カリキュラム・マネジメント
  （カリキュラム・マネジメントを確立して教育活動の質を向上させ，学習の効果の最大化を図ります。）
- ○　社会に開かれた教育課程
  （保護者の皆さまや地域の皆さまのお力添えをいただきながら，よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を達成していきます。）

1－1－1　新教育課程で求められる資質･能力の三つの柱

①　「何を知っているか、何ができるか」(個別の知識・技能)

②　「知っていること・できることをどう使うか」(思考力・判断力・表現力等)

③　「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか」(学びに向かう力、人間性等)

すべての学びが人間としてよりよく生きることへと方向づけられることが大切である

つまり、モラル・アクティブ・ラーナーを育てることが目標となる
（そのための学びが、モラル・アクティブ・ラーニングである）

１－１－２　主体的・対話的で深い学びとは

主体的 ➡ 自ら興味関心（問い）をもって取組むこと

対話的 ➡ 様々な対象（他者）と双方向的な関わりをもつこと

深い学び ➡ より深く自らに問いかけ、興味関心や双方向的な関わりを深めて、学びをよりよい自己、よりよい社会の形成へと発展させていくこと

★　**深い学びとは、主体的で対話的な学びを通して自らの生き方（よりよい自己形成とよりよい社会づくり）に深く関わっていく学び**

１－２　中央教育審議会答申「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して（2021.3.26）
（知・徳・体の全人教育、全員への教育保障）

「一人一人の児童生徒が，自分のよさや可能性を認識するとともに，あらゆる他者を価値のある存在として尊重し，多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え，豊かな人生を切り拓き，持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが必要」であるとする。そして、2020年代を通じて実現すべき教育として、個別最適な学びと協働的な学びを統合させる「令和の日本型学校教育」を提唱している。

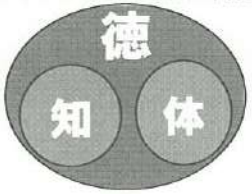
１－２－１　日本型学校教育の確認
改正教育基本法（２００６．１２）から
ー道徳教育が教育の根幹に位置づくー

・第１条　教育の目的　「教育は、人格の完成を目指し、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない。」

・第２条　教育の目標　「一　幅広い知識と教養を身に付け、真理を求める態度を養い、豊かな情操と道徳心を培うとともに、健やかな体を養うこと。　二～五は　学習指導要領の道徳の内容項目に関連する内容が示されており、語尾はいずれも「態度を養う」となっている。

・第３条　生涯学習の理念　「国民一人一人が、自己の人格を磨き、豊かな人生を送ることができるよう、その生涯にわたって、あらゆる機会に、あらゆる場所において学習することができ、その成果を適切に生かすことのできる社会の実現が図られなければならない。」

★　**知、徳、体の関係**



・徳･･･人間としてよりよく生きる力
・知･･･知識、技能
（思考力、判断力、表現力、等を含む）
・体･･･健康、体力

１－３　Society.5.0社会の実現に向けた学校改革

Society5.0（超スマート社会）

サイバー空間（仮想空間）とフィジカル空間（現実空間）を高度に融合させたシステムにより、経済発展と社会的課題の解決を両立する、人間中心の社会。

文科省の取組

共通して求められる力として「文章や情報を正確に読み解き対話する力、科学的に思考・吟味し活用する力、価値を見つけ生み出す感性と力、好奇心・探求力」を求めている（「Society 5.0に向けた人材育成に係る大臣懇談会報告」平成30年6月5日）

「GIGAスクール構想」を立ち上げ、「１人１台端末と、高速大容量の通信ネットワークを一体的に整備することで、特別な支援を必要とする子供を含め、多様な子供たちを誰一人取り残すことなく、公正に個別最適化され、資質・能力が一層確実に育成できる教育環境を実現する」としている。

1－4　新たな教育振興基本計画 〈概要〉
令和5年度～9年度　令和5年6月8日　閣議決定

次期計画のコンセプト

2040年以降の社会を見据えた持続可能な社会の創り手の育成

- **将来の予測が困難な時代**において、未来に向けて**自らが社会の創り手**となり、課題解決などを通じて、**持続可能な社会**を維持・発展させていく
- **社会課題の解決**を、経済成長と結び付けて**イノベーション**につなげる取組や、一人一人の**生産性向上等**による、**活力ある社会の実現**に向けて「**人への投資**」が必要
- **Society5.0**で活躍する、主体性、リーダーシップ、創造力、課題発見・解決力、論理的思考力、表現力、チームワークなどを備えた人材の育成

日本社会に根差したウェルビーイング（※）の向上

- **多様な個人**それぞれが**幸せや生きがい**を感じるとともに、**地域や社会**が**幸せや豊かさ**を感じられるものとなるための教育の在り方
- 幸福感、**学校や地域でのつながり**、利他性、協働性、**自己肯定感**、自己実現等が含まれ、協調的要素と獲得的要素を調和的・一体的に育む
- **日本発の調和と協調**（Balance and Harmony）に基づくウェルビーイングを発信

※身体的・精神的・社会的に良い状態にあること。短期的な幸福のみならず、生きがいや人生の意義などの将来にわたる持続的な幸福を含む概念。

今後の教育政策に関する基本的な方針

①グローバル化する社会の持続的な発展に向けて学び続ける人材の育成

- **主体的に社会の形成に参画**、持続的社会の発展に寄与
- **「主体的・対話的で深い学び」**の視点からの授業改善、大学教育の**質保証**
- 探究・STEAM教育、文理横断・文理融合教育等を推進
- グローバル化の中で**留学等国際交流**や大学等国際化、外国語教育の充実、SDGsの実現に貢献するESD等を推進
- **リカレント教育**を通じた高度人材育成

②誰一人取り残されず、全ての人の可能性を引き出す共生社会の実現に向けた教育の推進

- 子供が抱える困難が多様化・複雑化する中で、個別最適・協働的学びの一体的充実やインクルーシブ教育システムの推進による**多様な教育ニーズへの対応**
- 支援を必要とする子供の**長所・強みに着目**する視点の重視、**地域社会の国際化**への対応、**多様性、公平・公正、包摂性**（DE&I）ある**共生社会の実現**に向けた教育を推進
- **ICT等の活用**による学び・交流機会、アクセシビリティの向上

人生100年時代に**複線化する生涯**にわたって**学び続ける**学習者

③地域や家庭で共に学び支え合う社会の実現に向けた教育の推進

- **持続的な地域コミュニティの基盤形成**に向けて、**公民館等**の社会教育施設の機能強化や**社会教育人材**の養成と活躍機会の拡充
- **コミュニティ・スクールと地域学校協働活動の一体的推進**、家庭教育支援の充実による学校・家庭・地域の連携強化
- **生涯学習**を通じた自己実現、地域や社会への貢献等により、**当事者**として**地域社会の担い手**となる

④教育デジタルトランスフォーメーション（DX）の推進

- **DXに至る3段階**（電子化→最適化→新たな価値(DX)）において、第3段階を見据えた、**第1段階から第2段階への移行**の着実な推進
- **GIGAスクール構想**、情報活用能力の育成、校務DXを通じた働き方改革、教師のICT活用指導力の向上等、DX人材の育成等を推進
- 教育データの標準化、基盤的ツールの開発・活用、**教育データの分析・利活用**の推進
- デジタルの活用と併せてリアル（対面）活動も不可欠、学習場面等に応じた最適な組合せ

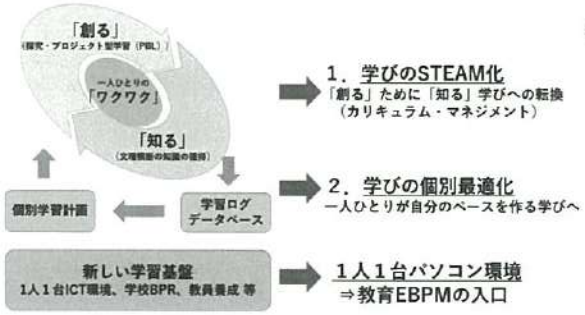
⑤計画の実効性確保のための基盤整備・対話

- **学校における働き方改革、処遇改善、指導・運営体制の充実**の一体的推進、**ICT環境**の整備、経済状況等によらない学び確保
- **NPO・企業等多様な担い手**との連携・協働、安全・安心で質の高い教育研究環境等の整備、児童生徒等の安全確保
- **各関係団体・関係者（子供を含む）との対話**を通じた計画の策定等

1

1－5　経済産業省が進める「未来の教室」のコンセプト

※経済産業省公表資料より



1．学びのSTEAM化
「創る」ために「知る」学びへの転換
（カリキュラム・マネジメント）

2．学びの個別最適化
一人ひとりが自分のペースを作る学びへ

1人1台パソコン環境
⇒教育EBPMの入口

★　文部科学省、経済産業省、デジタル庁が一体となってGIGAスクール構想に基づく教育DX（デジタル・トランスフォーメーション）に取り組んでおり、一層加速される

1－6　2030年以降の社会をどう捉えるか

2030年の社会予測からの新たな変化

VUCA（予測困難で不確実、複雑であいまい）な時代が加速

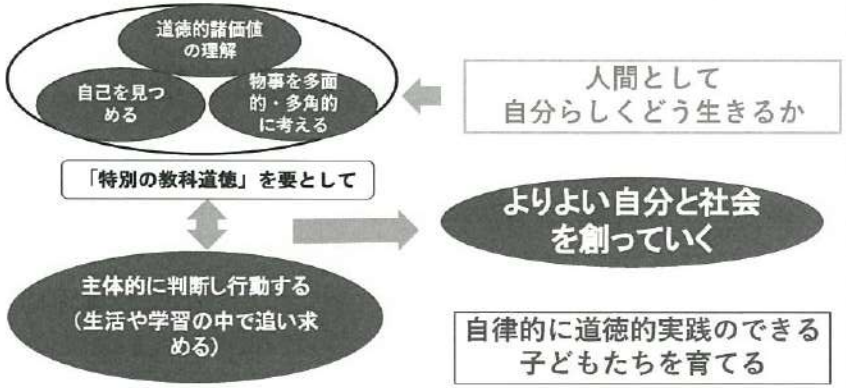
- 世界的な新型コロナウイルス感染
- ロシアのウクライナ軍事侵攻、そのための世界的混乱
- 中国の台頭、東アジアの飛躍的成長（日本の低成長）
- チャットGDTの開発など生成AIの発達　　等

求められる対応

- 突発的な世界的危機（混乱）や急激な世界の変化への対応（対策や解決への協働等）
- 急激な技術革新への対応（再生エネルギー、食糧、医療、介護等）
- 急激な社会構造や生活文化の変化への対応
  （少子高齢化、5G、6G、共生等）
- AIの発達による危険な活用への対応（自己開発と自己規律等）　　等

2　学校改革をリードする道徳教育

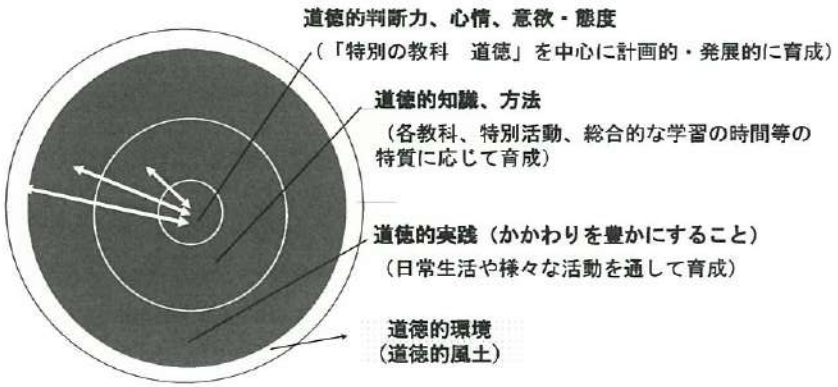
2－1　道徳教育と「特別の教科　道徳」の目標



2－1－1　道徳教育推進上の留意点

道徳教育を進めるに当たっては，**人間尊重の精神**と**生命に対する畏敬の念**を家庭，学校，その他社会における**具体的な生活の中に生かし**，**豊かな心**をもち，伝統と文化を尊重し，それらを育んできた我が国と郷土を愛し，**個性豊かな文化の創造**を図るとともに，**平和で民主的な国家及び社会の形成者**として，公共の精神を尊び，社会及び国家の発展に努め，他国を尊重し，**国際社会の平和と発展や環境の保全に貢献**し**未来を拓く主体性のある日本人**の育成に資することとなるよう特に留意すること。

※　道徳教育の全体と「特別の教科道徳」の関係



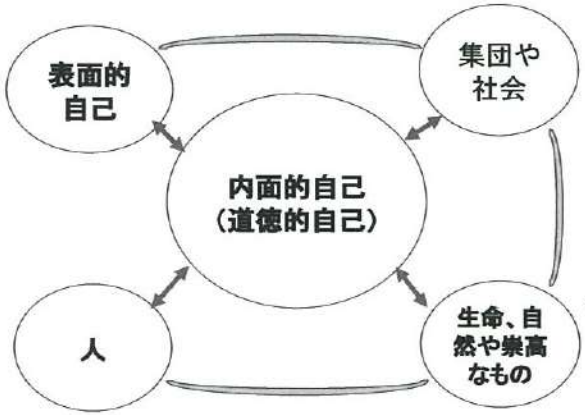
2－2　道徳の内容

道徳性はかかわりを豊かにすることから発達すると捉え、その主なかかわりを４つ（自分自身、人、集団や社会、生命・自然や崇高なもの）にまとめ、それぞれのかかわりを豊かに持つための心構え（姿勢）として内容項目が示されている

※　内容項目は実際の生活において自分（自分たち）を成長させるかかわり（自分、人、集団や社会、生命・自然や崇高なもの）を豊かにし、自己形成を図る窓口となるもの

★『小学校（中学校）学習指導要領』の「第3章　特別の教科　道徳」の「第3　指導計画の作成と内容の取扱い」の「2　第2の内容の指導に当たっては、次の事項に配慮するものとする。」の中の「（3）児童（生徒）自ら道徳性を養う中で、自らを振り返って成長を実感したり、これからの課題や目標を見付けたりすることができるよう工夫すること。その際、道徳性を養うことの意義について、児童（生徒）自らが考え、理解し、主体的に学習に取り組むことができるようにすること。（また、発達の段階を考慮し、人間としての弱さを認めながら、それを乗り越えてよりよく生きようとすることのよさについて、教師が生徒とともに考える姿勢を大切にすること。）」（（　）内は中学校）と明記されている。

※ 内面的自己（道徳的自己）と4つのかかわりと内容項目の関係



内容項目を窓口にしてかかわりを深める

それぞれがかかわりをもっており、内容項目もそれぞれのかかわりに関係してくる

★子どもたち一人一人がそれぞれに発展させた道徳的価値意識を多様に活用し統合しながら具体的な道徳的課題や状況に対応できるようにする。そのこと自体が道徳性の発達である

2－3　「特別の教科　道徳」の評価

従来の評価観を180度転換することを求めている

『小学校（中学校）学習指導要領』の「第3章　特別の教科　道徳」の「第3 指導計画の作成と内容の取扱い」の中の「4　児童（生徒）の学習状況や道徳性に関わる成長の様子を継続的に把握し、指導に生かすよう努める必要がある。ただし、数値等による評価は行わないものとする。」と明記されている

※教えたことをどの程度理解し身に付けたかを中心とする評価観から子どもたちが本来もっているよりよく生きようとする心をいかに目覚めさせ、引き出したかを中心とする評価観へ

★　個人内評価で成長した道徳性を記述式で示し一人一人を勇気づける
★　子どもたち自身が自己評価・自己指導を深めていけるようにすることが大切
★　子どもたちのよりよく生きようとする心に関する「よいところ探し」が評価

2－4　道徳教育を充実させることで人間観、指導観、評価観を変えていく

人間観	誰もがよりよく生きようとしている（子どもへの信頼、リスペクト）
指導観	多様な主体的・対話的な学びを通して子ども自身が内なる力（よりよく生きる力）を伸ばしていくようにする
評価観	一人一人のよりよく生きる心や力の成長を評価する（自己評価・自己指導につなげる）

★　子どもを主体としたこれからの学校教育の原点が示されているととらえられる

3　これからの道徳教育、「特別の教科　道徳」の課題と対応

※　検討したい3つの課題と対応

（1）未来への肯定的感情を育む（絶対的信頼感の確立）
不安感をどう軽減し、未来への希望へとつなげていくか。そのためには、自分自身、他の人、集団や社会、生命や自然・崇高なものに対し絶対的信頼感を培うことが大切

（2）自己の成長を確認できる取組を継続する（自己形成ノートによるリフレクション）
絶対的信頼感を持つと同時に、自分の成長を実感し学び続けることが課題。失敗したり不信感、不安感に陥っても、それを乗り越えて成長する自分の自覚と目標をもって計画的に様々な課題にチャレンジし乗り越える体験が大切

（3）多様性を受容しともによりよい自己、よりよい社会を目指す道徳力を育む
（多様な教材、多様な課題、多様な思考、多様な学習形態による学び）
激変する社会にどう生きるかが課題。社会の実態や課題を理解するとともに、グローバル化が進む社会において、協働してよりよい社会を切り拓いてためには、多様性を受容することが大切。そして同時に、共通性（共通課題）を確認することから、協働してその獲得に取り組んでいく力が必要

★　これらの学習において一人一台端末の利活用を工夫する

３－１　未来への肯定的感情を育む

絶対的信頼感を形成するには

1．心身の安定
- ・マインドフルネス、リラックス運動、生活リズム　等
- ・集団（他者）からの承認、自然体験　等

2．幸せ感
- ・ストレスホルモン（コルチゾール、ノンアドレナリン等）が出る状況を少なくし、幸せホルモン（オキシトシン、セロトニン、ドーパミン等）が出る状況を多くする　等
- ・自己達成感、自己有用感　等

3．未来への希望、夢
- ・勇気づけられる事実や話、心に響く事実や話、豊かにイメージできる世界　等
- ・あこがれる人物、モデルとなる人物　等

（授業の前の学び）		（道徳の授業での学び）		（授業後の学び）
心地よさを実感する体験（感覚器官を通して） 人間の特質の理解（教科での学習を通して）	⇔	人間として生きる喜び・人間への信頼・自分への信頼、尊厳へ	⇔	習慣形成へ エクササイズへ 学級創造表現活動へとつなぐ（学級経営）等
人とのかかわりで嬉しかった体験・集団や社会とのかかわりで嬉しかった体験・生命、自然や崇高なものとのかかわりで感動した体験	⇔	かかわりの中で生きる人間、それらに支えられて生きている自己の自覚へ	⇔	かかわりを豊かにする実践へ 他者を支える実践へ 夢や希望を追い求める体験へ　等
様々な分野で活躍する（活躍した）人物に関する学習 身近な人の生き方に関する学習	⇔	未来を拓いていく人物の生き方から自分の生き方を学ぶ	⇔	魅力的な人物についての学びを深める 常に対話をする　等

３－２　自己の成長を確認できる取組を継続する（自己形成ノートによるリフレクション）

自己の成長を実感する学び

頭の成長・・・知識、見方・考え方、思考方法、応用力等の発達

心の成長・・・道徳的価値意識の深まり、非認知能力等の発達

体（行動）の成長・・・身体能力、行動（実践）能力等の発達

この学びを記録し、自己を見つめ、成長を実感し、課題を見出し、自ら取り組もうとする

みんなと協働しながら自分と社会の未来に希望と夢を描き追い求める

（授業の前の学び）		（道徳の授業での学び）		（授業後の学び）
日々の生活の記録 日々の学習（授業）の記録	⇔	・継続することの大切さの自覚へ ・成長（心と頭と体）の自覚へ	⇔	記録を継続し、リフレクションしながら成長を実感する
興味あることに取り組み成し遂げる体験（自分で、自分たちで） 難しい課題に取り組む体験（自分で、自分たちで）	⇔	・努力すること、挑戦することで成長することの自覚へ ・新しい自分の発見	⇔	自分で課題を見つけ継続的に取り組み成長を実感する

各教科、学活、総合のノート、道徳ノートの工夫が大切（タブレットの活用も）

※ 道徳ノートの工夫（タブレットの活用も）

1．事前の学習のスペースを取る
（いつも何らかの課題を出す）
2．授業で自由にメモできる頁を1頁取る
（自由にメモできるようにする。板書に関する記述も）
（その頁に後で板書の写真やプリントも貼れるようにする）
3．中心発問に関する記述のスペースを取る
（友達の意見で参考になったことなども書くようにする）
4．自分とのかかわりで記述するスペースを取る
（そこから自己課題を書けるようにする）
5．今日の授業の自己評価項目を示し評価ができるようにする
6．事後の学習を記述するスペースを取る
（自己課題の追究や事後に気づいたこと取り組んだことなどを書く）
（3，4，5，はワークシートに記入し、授業後にノートに貼ってもよい）
★ 学期の終わりに学んだ全体を振り返り、自己評価、自己課題なども記入できる頁を創っておくこともポイント

3－3 多様性を受容しともによりよい自己、よりよい社会を目指す道徳力を育む

（多様な教材、多様な課題、多様な思考、多様な学習形態による学び）

① 社会の変化、社会の課題に向き合う道徳学習

地域、国内外の様々な社会的実態や課題に気づき、関心を持ち、考え、対応を考える機会を計画的に設ける必要がある。**情報科**を新設することも考えられる。廊下に世界地図、日本地図、県地図、市地図、地域地図を掲示し、その横に1週間ごとに新しい情報を子どもたちが分担して更新していく取り組みも行いたい。各教室には「道徳コーナー」を設けてその週の道徳の授業で取り上げた教材や補助資料、話し合ったことなどを掲示して継続的に考えられるようにしたい。

（授業の前の学び）
・日常生活での課題や地域課題、社会や生活の変化や課題に関する学習
・実態を学んだり考えたりして理解する教科等の特質に応じた学習　等

（道徳の授業での学び）
社会の変化、社会的課題等を人間としてどう生きるかという側面から考え自分（自分たち）の生き方の自覚へ（情報へのかかわり方や自己規律の確立も含めて）

（授業後の学び）
自分（自分たち）にできることを実践する。
さらに実態を調査し理解を深めながら自分（自分たち）の生き方を考え実践へとつなげていく。　等

※ プロジェクト型道徳学習の推進

社会的課題等は子どもたちがこれからの社会をどう生き抜くかに関わる課題である。自らの生き方とかかわらせて追究することが大切であり、そのためには、「特別の教科　道徳」の学習を要として、実態を知る学習や調べる学習、実際に取り組む学習等をつないで課題を追究する学び（総合単元的な道徳学習）が必要。「特別の教科　道徳」を取り入れることによって、道徳性全体の発達とかかわらせてこの学習を位置づけることができる。

ポイント

・できれば、具体的な創造表現物や行動目標を考え、それを人々に示したり実践することから効果を実感できるようにしたい（人に役立つ体験、人に喜んでもらえる体験を考える）
・計画段階から子どもたちも参画し取り組みながら柔軟に活動を発展させていったり修正したりする（適宜評価活動を入れる）。
・保護者や地域の人たちや専門家の人たちにもかかわってもらうようにする。
・特に地域住民（高齢者家庭など）の情報格差（Digital Divide）への対応も取り入れたい。

※ 多様な教材の開発

• 教科書の教材を確認したうえで、多様な教材を開発することが大切。様々な社会や生活の変化の中でどう生きるかを考えることができる教材を開発したい。

・教師が探す
・子どもたちが探す
・専門家に提供してもらう
・他の学校で使っている教材を共有する
等

→

・教師たちで教材化し指導案を創る（補助資料、教具、ワークシート等も）
・子どもたちと一緒に教材化し指導案を創る（補助資料、教具、ワークシート等も）
・他の学校で使っている教材を検討し指導案を創る（補助資料、教具、ワークシート等も）

→

・授業実践を通して修正する
・教材、指導案、補助資料、教具、ワークシート等一式をセットにして保管する
等

② 道徳の授業における多様性を受容し、展開する指導過程

- 様々な道徳的状況や課題に対して、それぞれの感じ方や考え方などを出し合いながらより多様に考え、話し合い、共通理解を図りながら、どうすればいいのかを判断し行動やさらなる思考へとつなげていく指導過程が求められる。
- 特に課題となるのは、いかに多様な意見を引き出すかと、多様な意見をどのように整理するのか、またどのように自己を見つめこれからのことを考えられるようにするのか、が考えられる。
- 道徳の授業では、どの授業においても、目指すべき目標は、「よりよい自己の形成とよりよい社会の形成」である。その目標を共有する（確認する）ことによって、多様性を受容でき議論を深めることができる。
- 特に大切なのは寛容の心を育むことである。

②－１ 道徳の授業で子どもたちに育んでほしい信念

○ 自分は必ずよくなる（自分を信頼）

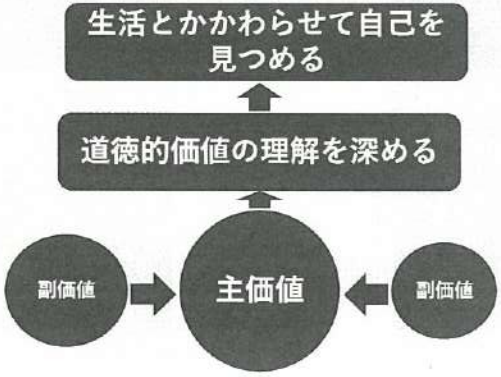
○ だれもがよりよく生きようとしている（先生や友達を信頼）

○ みんなと一緒によりよい集団や社会をつくっていける自分もみんなも成長できる（未来に対する絶対的信頼）

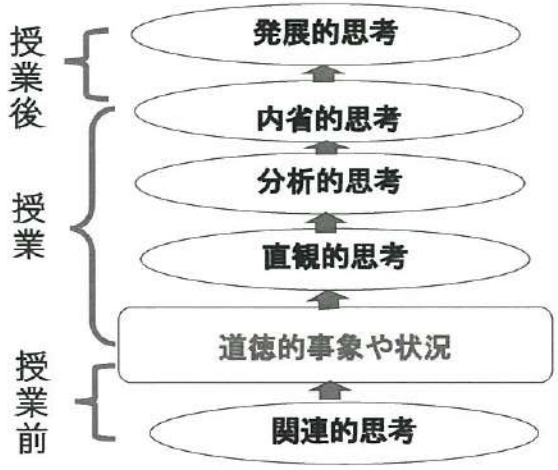
★ 以上の信念につながる**想像力（イメージする力）**や**構想力（創造する力）**を育むことが大切。それは、**わくわく感、期待感**をもてる授業にすることでもある。

②－２ 主価値と副価値を押さえる

教材分析しながら、副価値を明確にする。そして主価値と副価値とをどのように関わらせながら授業を展開できるかを考える。そのことで主価値の理解を深め自己を見つめられるようにする。



②－３ 道徳の授業における基本的思考の流れ



②－４　直観的思考

道徳的な事象や状況に対して感覚的に感じること

**例えば、どうしてだろう、すごいなー、楽しそうだなー
悲しくなるなー、やってみたいなー　等**

**道徳的価値に気づいたり、興味を
もったり、新たな考えに気づいたり
するきっかけとなる**

②－５　分析的思考（多面的・多角的に考える）

（道徳的価値の理解を深めることは様々な視点から考えることと関係する）

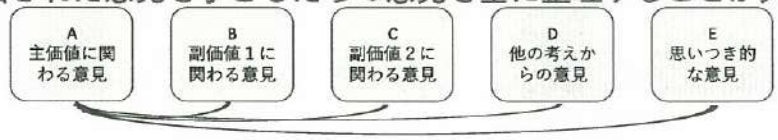
1　思考軸を移動させる
- 対象軸（立場を変えて考える）
- 時間軸（時間を移動させて考える）
- 条件軸（条件を変えて考える）
- 本質軸（どうして,そもそもを考える）

2　思考形態を変える
- 疑問的思考
- 批判的・論理的思考
- ケア的・心情的思考
- 創造的・発展的思考

3　思考ツール
（思考を促すための手立て）
- 構造的な板書
- 心情曲線
- 心の綱引き
- 天秤棒
- 線上での位置
- 階段図　・鏡餅図
- ウェブ図　・水に浮く氷図
- 4象限図　・ランキング
- 分割図　・グルーピング
- Y字図　等

※　出された意見を整理する

★　出された意見を子どもたちの意見を基に整理することが大切



- まとめると考えると本時のねらいを強調することになりがち
- まとめるのではなく、どのような意見が出ているかを整理することが大切
- そのことで全員の意見が尊重される
- そこには副価値的なもの等があるはず。それらを主価値（本時のねらいとかかわる道徳的価値）との関連でとらえられるようにもっていく
- そのことによって主価値の理解を深めるし、より自分の生活とかかわらせてとらえられる

②－６　内省的思考

道徳的価値に照らして

私

- 今までの自分（自分たち）
- 今の自分（自分たち）
- これからの自分（自分たち）

私たち

自己課題・我々課題を明確化

②-7　価値観多様化時代において いかに寛容の心を育てるか

（憎しみを乗り越える力の育成が大切）

憎しみからは何も生まれない
（憎しみを繰り返していくだけ）
憎しみを乗り越える力をどう育てるか

違いと同時に共通の課題（目標）を見出す
共通の課題（目標）に対して一緒に追い求める
そのための知恵を道徳の授業で学び、日常生活や様々な学習活動の中に生かしていく
（腹の立つ、許せない相手に対して相手の立場に立って考えることは簡単にはできない。しかし、同じ人間である、一緒に生きていかなければならないと考えた時どうすればいいのかを協働でしっかり考えられるのではないか）

憎しみは人格を破壊する
―憎しみを乗り越える道徳性の育成を―

押谷由夫

ロシアのウクライナ軍事侵攻が一年以上続いています。そのような中、ＮＨＫスペシャルで「キーウ　子どもたちの冬」が放送されました。昨年（2022年）の9月に学校が再開されて後、4か月にわたる取材を基にした番組でした。

戦争の中での先生方の問いかけ―憎しみをいかに乗り越えるか―

様々な戦争体験をしてきた子どもたちは、異口同音にロシアへの憎しみを口にします。先生方は悩みます。校長は、きっぱりと「憎しみは人格を破壊する。子どもたちと一緒に戦争について話し合ってみましょう。」と提案し、各クラスで戦争について話し合う授業が展開されていきます。

10学年クラスのイオール君は、尊敬する軍人のお父さんが重傷を負ったことから、「軍人になって占領者と戦う義務がある」と主張します。先生はその意見を受け入れながらも、「どうすれば許す強さを手に入れられるだろうか」と問いかけます。母が父の所に行く機会をとらえて、テレビ会話で父と話します。父は「子どもたちに戦争を見せたくないから戦っている」と言います。イオール君の心に徐々に変化が現れます。そして、冬休み後の授業では、「憎しみだけではなく、希望を見つけられるようにしたいです」と話します。

教師の役割と道徳教育の大切さ

戦争のさなかでも、先生方は、子どもたちの未来と国の将来を考えています。学校は、未来を創っていく子どもたちを育てるところです。よりよい自分、よりよい社会をどのようにイメージし共有化していくか。そのためには、憎しみを乗り越える力が必要だととらえます。憎しみを持ち続ければ、不幸な出来事を平気で繰り返すことになります。人格を破壊している姿そのものです。

人格の基盤が道徳性であるといわれます。人格をもち続け、人間として成長していくには、道徳性が不可欠なのです。

未来を愛と希望をもって切り拓く子どもたちを育てる

日本は、ウクライナとは違います。しかし、いじめや問題行動が依然として深刻な状況にあります。相手に対する不快の感情や憎しみが子どもたちの間に潜在しているのではないかと考えられます。

腹が立つ、許せないと思う相手に対して、相手の立場に立って考えることは簡単にはできません。相手への憎悪を強める場合もあります。そのことを踏まえずに、思いやりの心や生命尊重の心を育てようとしても、砂上の城郭に終わってしまいます。

道徳の授業は、子どもたちの心に響く授業が大切です。それは、心の内の対話が起こる授業です。教材や先生の問いかけ、友達の発言などを基に、子どもの内面にある素直な気持ちや考えを出し合い交流します。それは多様ですが、そのことを踏まえたうえで、互いをリスペクトし、協働してよりよい社会を創っていくという目標を共有し、いかに課題を乗り越えていくかを道徳的価値の側面から追求します。それは、「特別の教科　道徳」を要に、全教育活動を通して行う必要があります。

そのことを基盤として、未来を愛と希望をもって切り拓いていく子どもたちを育てるのが、令和の日本型道徳教育であるといえます。

「たとえ明日世界が滅亡しようとも、
今日私はリンゴの木を植える。」

Even if I knew that tomorrow the world would go to pieces, I would still plant my apple tree.

ドイツの宗教家マルティン・ルターの言葉